

施設レポート

地域のニーズに応じた役割を担う 医療機関となり成長を続ける

医療法人健佑会 いちはら病院（茨城県つくば市）



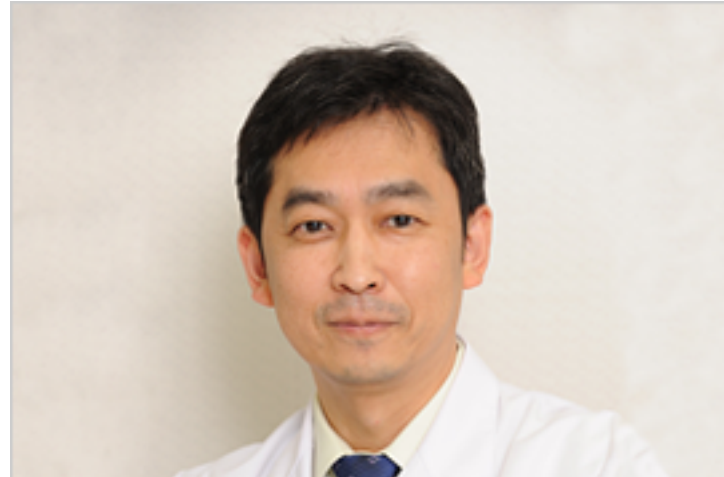
茨城県つくば市のいちはら病院は、地域住民のニーズや周辺医療機関の体制に応じて役割を変化させながら成長を続け、「いちはらメディカルグループ」として医療・福祉をサポートして地域に貢献しています。今回、県内トップクラスの膝・脊椎関連手術件数や県内最大級の回復期リハビリ病床を担うまでに至ったいちはら病院の体制や地域での役割、課題などについて、院長の池田耕太郎先生に伺いました。

医療法人健佑会 いちはら病院 病院長 池田 耕太郎 先生

専門性を高めた診療、手厚いリハビリ、スポーツ外傷に対する迅速な対応で支持を得る

-いちはら病院の概要について教えてくださいか。

池田先生 当院は、つくば市北部に位置する整形外科を主体とした病院です。私が非常勤として勤務を始めた1993年に「膝関節専門外来」を開設し、常勤となった2005年に「つくば膝関節センター」へと発展させ、膝関節疾患に対する専門性を高めてきました。さらに林浩一郎名誉院長（元 筑波大学整形外科 教授）がセンター長を務められたスポーツ傷害に対する専門部門「県南スポーツ医科学センター」も開設しており、若年者のスポーツ外傷から高齢者の変性疾患まで、さまざまな膝関節疾患の患者さんに来院いただいています。ほかに、「つくば脊椎センター」、「つくばリウマチセンター」も開設しており、膝関節疾患以外でも専門性の高い診療体制を整えています。また、当院は駅から遠く、バスも不便な立地にあり、目立った広報活動もしていないのですが、外来患者数は右肩上がりを持っています。来院理由として最も多いのは患者さんの口コミで、ほかに周辺医療機関や接骨院からの紹介、学校部活の先生からの紹介などが挙げられます。



池田 耕太郎 先生

-地域の方々から支持される理由は何でしょうか。

池田先生 1つは、専門性の高い診療を提供していることだと思います。検査機器として3.0T MRIを導入しており、整形外科領域に精通した放射技師もいるため、精度の高い検査・診察が可能となっています。さらに平日は終日、整形外科のみで手術室を使用できる環境があるため手術件数も右肩上がり、現在は年間1000件を超えており、膝関節鏡視下手術は約350件、人工膝関節置換術は約200件、脊椎関連手術は270件と県内トップクラスの手術件数です。

もう1つは、手厚いリハビリ体制です。急性期病院は早期退院を求められ2週間以内に退院するケースが増えていますが、必ずしも術後の回復が追いついていないわけではないので、早く退院させるほどリスクを伴うと考えています。また早期退院は、高齢者では本人だけでなくご家族の負担になることも多いですし、「最後まで診てくれない」といった不信感に繋がってしまうこともあります。当院では、県内最大級の120床の回復期リハビリ病棟を併設しており、十分に回復するまで無理なく入院を継続してリハビリが行える環境を整えており、これが満足度向上に繋がっていると思います。また、100名を超えるリハビリスタッフがおり、質の高いリハビリを提供できるようにしています（写真）。



写真:(左)リハビリ室 (右)リハビリ用トラック

-多くのリハビリスタッフがおられますが、リハビリの質を保つためにどのような取り組みをされていますか。

池田先生 リハビリ職などを育成する茨城県立医療大学付属病院 前院長の和田野安良先生が週1回、非常勤で診察を行っており、その際にリハビリスタッフへの講義も実施していただいています。また、茨城県立医療大学付属病院の脳外科や内科の先生にも月2回程度、講義を行っていただいています。ほかに、リハビリスタッフ自らが勉強会を開くなど自発的な取り組みも行っています。このように施設外からの支援も得て、質を保つような教育体制を整えています。しかし、一人前になると次のステップに向けて当院を去ってしまう若いスタッフも少なくありません。人材が流出してしまうのは残念なことではありますが、地域に当院とゆかりのある仲間が増え人脈が広がることになりましたから、悲観的に考えているわけではありません。新卒の職員を一人前になるまで教育する学校のような役割も担っていると考えています。

-その他に特長がありましたら教えてください。

池田先生 私自身がアルペンスキーを長年やっていた関係もあり、当院はスキーを始めとしたナショナルチームとの関わりがあります。このような競技レベルの高い選手の受傷は、少しでも早く病態を把握したい、治したいという希望が強いため、迅速に対応する体制を整えています。試合や練習中に受傷した場合、現地のコーチ・トレーナー・選手本人から直接連絡が入り、すぐ当院に向かっていただき、可能限り当日中に検査、手術が必要な場合には翌日に手術をすることが可能です。海外で受傷して、成田空港から当院へ直行して治療した例もあります。欧州では、このような迅速な対応は珍しくありませんが日本では難しいことです。日頃より選手やコーチ達と連絡をとり、練習に足を運ぶことで信頼関係を築いていること、整形外科だけで手術室や検査機器を使える環境があること、スタッフに心構えがあることで、迅速な対応が実現できています。

地域のニーズに合わせて役割を変化させ成長。現在の課題はシームレスな医療連携

-介護系施設も充実しており、医療・介護の総合的なグループを展開されています。

池田先生 当院を始めとした「いちほらメディカルグループ」がここまでこられたのは、地域のニーズに合わせて役割を変えてきたからだと思います。介護の担い手がおらず自宅復帰できない患者さんに対応するため、介護保険制度が本格的に始まる以前より、介護老人保健施設を始めとした介護系施設を設立してきました。また病床区分も、時代に合わせて療養病床や亜急性期病床などを設け、回復期リハビリ病棟は制度開始後早期に開設し、現在では県内最大級の病床数までに至っています。回復期病床を充実させたのは、以前よりリハビリに注力していたこと、また茨城県は人口10万人あたりに対する回復期病床数が全国最下位となっておりニーズが高いということが挙げられます。ほかに、筑波大学附属病院が脳卒中の専門グループを設けて急性期治療を強化した際に、急性期後のリハビリの必要性が高まると考えて脳卒中専門のリハビリチームを立ち上げました。当院には歯科もあるため、専門性の高い口腔ケアや嚥下訓練なども行うことができます。また、口腔ケアは脳卒中患者さんに関わらず、整形外科においても術前後の感染リスクを軽減させるなどの重要な役割を果たしています。

-いちほら病院の現在の役割については、どのようにお考えでしょうか。

池田先生 当院の役割としては、地域の基幹病院として医療を提供する「地域におけるセンター的役割」、大学病院で受け入れきれない患者さんに対応する「大学病院のサテライト的役割」、急性期後のリハビリをカバーする「周辺急性期病院からの診療を継続する役割」、そして「いちほらメディカルグループ内での連携」の4つと考えています。特に3つ目の「周辺急性期病院からの診療を継続する役割」については、多くの課題があります。

-具体的には、どのような課題があるのでしょうか。

池田先生 ありきたりの言葉ですがシームレスな連携が果たせていません。急性期病院の患者さんは当院のことを全く知りませんので、転院が決まっても実際に転院するまでは不安を抱えてしまいます。急性期病院にいるときから当院の情報を提供し、不安にさせることなく転院していただけるのが理想の姿だと考えています。そのためには当院の情報を正確に発信することや、急性期病院の医療者との繋がりを密にとることが大切です。そこで、筑波大学附属病院や筑波メディカルセンターのカンファレンスに、当院の医師、看護師、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカーなどが伺うようにし、医療者同士の繋がりを強化すると同時に、患者さんに対して事前に情報を提供できる機会をつくっています。

-本当のシームレスな連携は、なかなか難しいと思います。

池田先生 当院のリハビリは質・量とも高い水準にありますし、脳卒中リハビリチームや医科歯科連携などの独自の体制を整えていますので、これを外部にアピールするのは病院長である私の使命だと思っています。急性期病院の患者さんが回復期リハビリ病院に転院する際に、「どこでもよい」ではなく「いちほら病院に行きたい」と指名していただけるよう攻めの広報活動を行い、当院の医療・介護技術を多くの患者さんに還元できるようにしていきたいと思っています。

[掲載 2017.12.25]